

個人ニュースサイトの 「ニュース」について考える

平井智尚



▶ はじめに

いま、仮に新聞やテレビに接触していなくても、ニュースを知っているということはあり得る。例えば、ポータルサイト「Yahoo! JAPAN」⁽¹⁾のトップページに掲載されたトピックスや、携帯電話のウェブ接続におけるメインメニューに掲載された見出しなどを通じてニュースを知ることができる。現在、日常生活におけるニュースの問題を考えるうえで、インターネットへの言及を欠かすことはできない。

こうした問題意識はニュース接触の手段・方法だけにとどめてはならない。従来の「ニュース」は、新聞社やテレビ局といったマス・メディア組織が報道する事件や出来事を指す概念といっても差し支えがなかった。しかし、インターネット利用の一般化に伴い、新聞紙面やテレビ番組で報道されない事件や出来事、例えば、「ニコニコ動画で話題のコンテンツ」のような「些末な」ネットの話題も「ニュース」として、ウェブサイトでは取り上げられる⁽²⁾。つまり、ネットの広範な利用はニュースの概念も変化させたのである。

……ニュースサイト閲覧者も新聞やテレビを第一の情報源とし、インターネットからの情報を補完する者から、逆にポータルサイトのニュースを中心として、新聞やテレビからの情報を必要としないようなニュース接触を行う者まで、様々なタイプに分化している。また、その過程において、「ニュース」という概念自体の変容も起こっている（成田，2009：2）

本論では、主に個人が運営しているニュースサイト、通称「個人ニュースサイト」を考察の対象とする⁽³⁾。ちなみに、個人ニュースサイトは古くから存在している⁽⁴⁾。それゆえ、それらに関する研究がまったくないわけでもない。だが、不十分である。

さて、こうした問題提起をしてみたいものの、本論はニュースサイト研究を取り巻く困難や限界を乗り越える試みではない。本論で行うことは、せいぜい、インターネットと

脚注

1. ウェブサイトに掲載された記事を引用・参照する場合には URL を明記するが、それぞれのウェブサイトの URL は原則として記さない。もちろん、URL を記すのは検証可能性という側面で必須である。ただ、検索エンジンの利用が一般化している現在において、各々のウェブサイトの URL まで付する必要性はないとも考える。
2. 「インターネット」と「ネット」は適宜使い分ける。どちらか一方に統一すると文脈・語感次第で据わりが悪くなるからである。
3. 個人ニュースサイトの「個人」は、必ずしも「一人の個人」を指すわけではない。筆者が観察した限り、本論で対象とするニュースサイトの大半は個人が運営していることがわかった。だが、「GIGAZINE」のように、サイト開設当時は個人が運営していたが、後に、複数人で記事を執筆するようになったケースもある。
4. 詳しくは、ばるぼら（2005）、ならびに本論の「おわりに」を参照。

ニュースにかかわる議論の中でこれまで看過されてきた側面に焦点を当てる程度である。それは、ニュースサイト論の一般化を目指すわけでもなければ、ニュースサイトの閲覧行動の実態を量的に確認するわけでもない。それでも、本論の試みはインターネットが広く利用されている社会におけるニュース論の発展に寄与することはできる。

インターネットに言及するニュース論やジャーナリズム論の多くは以下のような問題を抱えている。マス・メディア組織の活動を補完するような、オルタナティブなニュース生産、そしてジャーナリズムの実現をインターネットに託す。それと同じ論理で、インターネットを通じたジャーナリズムを批判したり、限界を指摘したりする。これは一見すると、インターネットを包摂した議論のようであるが、実のところは、マス・メディアのニュース生産、あるいはジャーナリズム実践が前提となっている。この前提に基づいて議論を展開するのは自由であるし、場合によっては必要なだろう。ただ、それ以外にもニュースやジャーナリズムの道筋は存在する。本論では、いくつかの事例をふまえながら、ネットのニュース論やネット・ジャーナリズムのあり様を探し出していく。

▶ 1 ニュースサイトの類型化

「現在、インターネットのジャーナリズムで最も主要な位置を占めているのはニュースサイトである」(藤竹編＝中村, 2005:282)。この指摘は確かである。ただ、ひとえに「ニュースサイト」といっても、その特徴という点において一枚岩ではない。そこで、分析へと移る前にニュースサイトを特徴ごとに類型化しておく⁵⁾。

- ①主要なニュースサイト
- ②見出し／分類サイト
- ③メタサイト／コメントサイト
- ④参加型議論サイト

(Deuze, 2003 参照)

①「主要なニュースサイト」は、主にマス・メディア組織が運営するニュースサイトを指す。例えば、英BBCや米CNN、米ニューヨーク・タイムズなどが運営するニュースサイトがこれに該当する。日本でいえば、朝日新聞や読売新聞などの大手新聞社、NHKなどの放送局が運営するニュースサイトである。

②「見出し／分類サイト」は、他のニュースサイトへのリンクを掲載するサイトである。それは主要なメディア組織の中にあるのではなく、それらに時として依存するサイトである。ここに含まれるのは、サーチエンジンやマーケットリサーチ会社、あるいは、ニュースへの関心が高い個人などである。日本の例をあげると、「Yahoo! JAPAN」のようなポータルサイトや個人が運営するニュースサイトなどがここに当てはまる。この類型には幅広いニュースサイトが含まれる。

③「メタサイト／コメントサイト」は、主にマス・メディアが報道したニュースを集め、注釈やコメントをつけるサイトである。この種のサイトは、時として、マス・メディアの批判や監視をしたり、マス・メディアとは異なるオルタナティブな意見を掲載したりする。ここには、「見出し／分類サイト」と同様に幅広いニュースサイトが含まれる。日本では、

脚注

5. 言うまでもないことであり、経験的にも理解できると思うが、一つのニュースサイトが複数の特徴を有することは往々にして

ある。本章での類型化は、あくまでもニュースサイトの見取り図を描くための作業である。

「JanJan」や「日刊ベリタ」といったインターネット新聞がこれに該当する。また、電子掲示板「2ちゃんねる」や、同掲示板の文化と親和的なウェブサイトは、自らをマス・メディアのオルタナティブと規定してはいないものの、結果としてその機能を果たすことがある。

④「参加型議論サイト」は、文字通り、複数のネットユーザーが集まって議論が行われるサイトを指す。この類型に当てはまるのは、電子掲示板やオンライン・フォーラムなどである。また、Deuze (ibid, 211) はブログもこの類型に含まれると指摘している。例えば、ブログのコメントやトラックバック機能が参加や議論を担うと考えられる。

▶ 2 調査・分析対象とするニュースサイトの選択

本論の考察対象は個人ニュースサイトであり、そこに掲載されるニュースである。それらを対象とするのは、端的に言えば、先行研究がそれほど多くないためである。しかし、その事実は研究に携わる者たちの瑕疵であるとは言い切れない。個人ニュースサイトの議論は、繰り返すがそれほど容易ではない。

2-1 ニュースサイトの選択をめぐって

考察の対象としてどのニュースサイトが適当なのか。この取りかかりの段階に問題が横たわっている。そもそも、個人ニュースサイトは新聞やテレビ、あるいは「主要なニュースサイト」と違って無数に存在する。個人サイトとニュースの問題について言及した示唆的な研究がこれまでなかったわけではない（遠藤編，2004；遠藤，2007ほか）。しかし、それらは具体性をいささか欠いていた（具体性をもたせることが目的であったか否かは別として）。だがそのことを瑕疵として批判するべきではない。新聞やテレビとは異なり、適切な事例を選ぶのは極めて難しい。

では、この問題を乗り越えるためにはどうすればよいか。例えば、アクセス数（訪問者数）を指標として、上位のサイトを選択するという方法を思いつくかもしれない。このやり方はおそらく可能である。ただ、広大なウェブからアクセス数上位のニュースサイトを厳密に抽出するのは、潤沢な研究資金を持たず、特別なスキルを持たない（筆）者には難しい。仮に、いくつかのニュースサイトを絞り込めたとしても、それらのサイトがインターネット利用者の全体が閲覧しているとは限らない。実は、「偏った」ネットユーザーが繰り返しアクセスしているだけかもしれない。

だからといって、「本論はニュースサイト論の一般化を目指しているわけではないので、筆者が日頃閲覧しているニュースサイトを事例とする」と開き直るわけにもいかない。客観的な手法ではなく、結果的に偏りが生じるのは回避できないにせよ、一定の妥当性を確認できるような方法で対象とするニュースサイトを選ばなければならない。

2-2 対象とするニュースサイトの選択⁶⁾

(1) ニュースサイトのランキング調査

本項では、個人ニュースサイトのランキング調査を参考にして、調査対象とするニュー

脚注

6. このやり方はもちろん問題を抱えている。第一の手順では、ニュースサイトのランキングを調査した者の選定基準に依存している。そのため、そこから漏れるニュースサイトは自動的に対象外になってしまう。次いで、「はてなアンテナ」にせよ、二つのRSSリーダーにせよ、あくまでも、該当サービスを利

用しているユーザーの登録しか反映されない。それは、多くのユーザーが行っていると推定される、ブラウザのお気に入りや検索エンジン経由、あるいはリンク経由でのアクセスを踏まえることができない。

スサイトを選ぶ。参考にする調査では、いずれも「株式会社 はてな」が提供しているサービスの「はてなアンテナ」の被リンク数を調べて順位付けを行っている。「はてなアンテナ」とはユーザーが登録したサイトの更新を自動確認してくれるサービスであり、このサービスに多くの登録があるニュースサイトは、ユーザーの関心の度合いが高いと考えられる。

- ① 白い戯言「はてなアンテナから見る個人ニュース系サイトリンク集」(2007年1月5日)⁽⁷⁾
- ② 白い戯言「はてなアンテナから見る個人サイトリンク集 2007年秋 Ver.」(2007年9月5日)⁽⁸⁾
- ③ Futile Hope「個人ニュースサイトの被はてなアンテナ数を Ruby で計測してみた」(2008年2月24日)⁽⁹⁾
- ④ 鯨飲馬食コード「はてなアンテナの登録数ランキング (個人ニュースサイト篇)」(2008年7月6日)⁽¹⁰⁾

これら四つの調査における上位30のニュースサイトを時系列で並べたものが表1である。表1を見ると、どのニュースサイトが多くのユーザーの関心を集めてきたのかを確認することができる。なお、四つの調査は厳密に言えば同列で比較するのは難しい。その理由として、第一に、①②と③、④は、調査方法はほぼ同じでも調査者が異なる点、第二に、それぞれの調査は定点的に実施されたわけではない点があげられる。ただ、こうした問題は認められるにしても、ニュースサイトの人気の趨勢をおおまかに把握するという目的には十分に耐えうると考える。

さて、表1を見ると上位に位置するニュースサイトの顔ぶれはそれほど変わっていないことがわかる。それゆえ、最も新しい「鯨飲馬食コード」(2008年7月6日)のランキングを、そのまま調査対象として選択しても概ね問題はない。だが、30のサイトを調査対象とすると、逆に焦点がぼやけてしまうように思う。そこで以下の作業を行って調査対象を10個に絞り込んでいく。第一に、2008年7月6日のランキングの中から、以前に行われた3回の調査でもランクインしていたニュースサイトを選択する。第二に、選択したニュースサイトの中から上位10サイトを選び出し、それを実際の調査対象とする。第三に、作業としては不必要であるが、調査対象とする10サイトを選択した2009年7月13日の被アンテナ数を確認し、上から並べる=表2。

(2) RSS リーダーのランキングに基づくサイトの選択

次に、調査時における「livedoor Reader」と「feedmeter」のRSSリーダー登録ランキングを参照する。RSSリーダーとは、登録したサイトが更新されたときに新着記事を知らせるツールである。ここで二つのRSSリーダーの登録ランキングを参照するのは(1)の過程から漏れるニュースサイトを拾い上げるためである。なお、選択に際しては、両方のRSSランキングで30位以内に含まれており、本論の調査・分析対象に該当する個人ニュースサイトに限定した。例えば、asahi.comは両方のランキングに含まれているが、同サイトは朝日新聞社が運営するニュースサイトなので除外した。表3は、2009年7月13日時点のRSSリーダーランキングに基づいて選択したサイトである。

脚注

7. <http://d.hatena.ne.jp/whiteball22/20070105/1167934833>
同記事では、ウェブサイト「Parallels2」(<http://parallels.at-ninja.jp/>)に掲載されている個人ニュース系サイトのリンク集を対象として、はてなアンテナの被アンテナ数を調べて順位付けをしている。なお、以下にあげるURLはすべて2009年11

月23日に確認した。
8. <http://d.hatena.ne.jp/whiteball22/20070905/1188982333>
9. <http://d.hatena.ne.jp/t7n1kano/20080224/1203869121>
10. http://d.hatena.ne.jp/geiinbashoku2/20080706/a_newssite

●表 1

	白い戯言 2007/1/5	白い戯言 2007/9/6	Futile Hope 2008/2/24	鯨飲馬食コード 2008/7/6
1	ミュージックマシーン	ミュージックマシーン	ミュージックマシーン	カトゆ一家断絶
2	カトゆ一家断絶	カトゆ一家断絶	カトゆ一家断絶	X51.ORG
3	X51.ORG	X51.ORG	X51.ORG	ん?
4	ABC (アメリカン・パコメデイ) 振興会	Weekly Teinou 蜂 Woman	アキバ Blog (秋葉原プログ)	朝日新聞 -asame.com
5	Weekly Teinou 蜂 Woman	アキバ Blog (秋葉原プログ)	朝日新聞 -asame.com	Hjk/ 変人窟
6	【海外ボツ! News】	朝日新聞 -asame.com	Hjk/ 変人窟	【2ch】ニュー速クオリティ
7	Hjk/ 変人窟	Hjk/ 変人窟	楽画喜堂	楽画喜堂
8	朝日新聞 -asame.com	楽画喜堂	【2ch】ニュー速クオリティ-VIP-	ゴルゴ 31
9	かーず SP	イミフwwwうはwwwおkwww	ゴルゴ 31	イミフwwwうはwwwおkwww
10	アキバ Blog (秋葉原プログ)	【海外ボツ! News】	イミフwwwうはwwwおkwww	アキバ Blog (秋葉原プログ)
11	(・▽・) イイ・アクセス	ゴルゴ 31	(・▽・) イイ・アクセス	(・▽・) イイ・アクセス
12	楽画喜堂	「淡々と更新し続ける雑記。ゆみゆみゆみゆみ」	海外ボツ! News	ザイーガ
13	ザイーガ	(・▽・) イイ・アクセス	ザイーガ	セキュリティホール memo
14	pya!	【2ch】ニュー速クオリティ-VIP-	セキュリティホール memo	Narinari.com
15	ゴルゴ 31	ザイーガ	Narinari.com	音楽配信メモ
16	セキュリティホール memo	セキュリティホール memo	pya!	pya!
17	音楽配信メモ	pya!	音楽配信メモ	everything is gone
18	Narinari.com	音楽配信メモ	everything is gone	TBN
19	ねたミシュラン	Narinari.com	情報考学 Passion For The Future	情報考学 Passion For The Future
20	イミフwwwうはwwwおkwww	一流ホームページ	TBN	【2ch】日刊スレドガイド
21	everything is gone	ヤマカム R	日刊スレドガイド	放蕩オペラハウス
22	【2ch】ニュー速クオリティ	MOON PHASE	放蕩オペラハウス	RinRin 王国
23	萌えミシュラン	everything is gone	RinRin 王国	萌えミシュラン
24	放蕩オペラハウス	情報考学 Passion For The Future	萌えミシュラン	::::HK-DMZ PLUS.COM::::
25	情報考学 Passion For The Future	バーチャルネットアイドル・ちゆ12歳	::::HK-DMZ PLUS.COM::::	アルファルファモザイク
26	TBN	TBN	▼TS [NEW2]	▼TS [NEW]
27	サポテスタ	放蕩オペラハウス	小心者の杖日記	小心者の杖日記
28	▼TS [NEW]	LOGIC&MATRIX	BRAINSTORM	BRAINSTORM
29	RinRin 王国	MOON PHASE 雑記	ねたミシュラン	ねたミシュラン
30	最後通牒・半分版	萌えミシュラン	アルファルファモザイク	あやしい(°ー°)NEWS

●表 2

順位	サイト名	被アンテナ数
1	カトゆ一家断絶	5,026
2	X51.ORG	4,115
3	アキバ Blog (秋葉原プログ)	2,763
4	ゴルゴ 31	2,631
5	朝日新聞 -asame.com	2,566
6	【2ch】ニュー速クオリティ	2,566
7	楽画喜堂	2,503
8	Hjk/ 変人窟	2,449
9	イミフwwwうはwwwおkwww	2,003
10	(・▽・) イイ・アクセス	1,902





●表3

サイト名	livedoor Reader (登録数)	feedmeter
GIGAZINE	2位 (15,858)	8位
痛いニュース (ノヴ)	3位 (15,122)	3位
[N] ネタフル	6位 (10,367)	6位

* feedmeter の登録数は確認できなかったので割愛する

2-3 それぞれのニュースサイトの特徴

対象とするニュースサイトの選択を行ったが、前章で示したように、すべてのニュースサイトが同じ特徴を持つわけではない。このことは本論における重要な論旨の一つでもある。そこで調査・分析を行う前に、対象とするニュースサイトの特徴を先の類型を参考にしながら説明しておく。

- (1) 見出し／分類サイト——「カトゆ一家断絶」「Hjk/ 変人窟」「楽画喜堂」「朝日新聞-asame.com」「ゴルゴ31」「(・▽・) イイ・アクセス」「[N] ネタフル」

これらのサイトは次のように構成されていることが多い。①サイト運営者が自らの関心に沿って外部から集めたニュースや情報を引用・参照する形でニュースとして掲載している。②ニュースには（主に）1行の見出しがつけられ、見出しに引用・参照元のハイパーリンクが埋め込まれている。③場合によっては、それぞれのニュースに対して、運営者による1～数行のコメントが添えられている。④また、ニュースだけでなく、運営者の日記が掲載されていることもある。⑤ポピュラー文化関連のニュースが多く取り上げられるが、それだけに終始するわけではない（詳しくは4章で説明する）。

- (2) メタサイト／コメントサイト——「[2ch] ニュー速クオリティ」「痛いニュース(ノヴ)」「イミフwwwうはwwwおkwww」

これらのサイトは、掲示板・2ちゃんねるのスレッドに書かれた内容を編集して、記事として掲載している（以下では適宜「スレッドまとめサイト」とする）。この種のサイトはブログの普及とともに増加した。スレッドまとめサイトで扱う話題は多岐にわたるが、調査対象とするサイトでは時事的な内容を含む様々な話題を扱っている。なお、これらのサイトは、第一に、2ちゃんねるの書き込みをまとめた内容であるという点、第二に、コメント欄でユーザー同士のやりとりが行われることもある点で参加型議論サイトの特徴も有している。

- (3) ユニークサイト——「X51.ORG」「アキバBlog（秋葉原ブログ）」「GIGAZINE」

これらのサイトでは、主に、運営者が取材した話題・出来事をニュースとして掲載している（便宜的に「ユニークサイト」と定義しておく）。そのニュースは、たびたび、見出し／分類サイトで引用・参照される。例えば、「X51.ORG」ではオカルト関連のニュースを扱い、運営者は現地での取材も行っている。また「アキバBlog（秋葉原ブログ）」は、運営者が、東京・秋葉原に毎日赴き、同所の話題や出来事を取材して記事を掲載している。「GIGAZINE」は、見出し／分類サイトの機能も持つが、海外の話題・出来事など他のニュースサイトが扱わない記事を掲載し、食品やデジタル機器などのレビュー記事は独自のものが多くことからユニークサイトに分類しておく。

▶ 3 調査・分析へと移る前に

調査・分析の前に一連の作業を進める際の方法をごく簡単に示しておく。本論の以下では、「対象となる人びとや社会における意味の世界を学問の世界の言葉に置き換えながら解釈や分析をおこなっていく」（佐藤，2008：25）。本論の内容に置き換えると次のようになる。個人ニュースサイトにおける営みの記述，解釈を経て，ネットとニュース，および，ネットとジャーナリズムに関する学術的な考察へと展開していく。そのためには，まず，個人ニュースサイトへと実際に赴き（つまり，アクセスし），そして，ニュースの生産－解釈過程を直に観察することが必要となる。これは，従来，フィールドワークと呼ばれてきた調査方法に類似しており，本論もその手法を踏襲する。すなわち，ネットというフィールドで起こる，ニュースにかかわる相互行為や現象の観察を踏まえて，それらの意味構築過程をフィールドのコンテキストに沿って理解し，学術的な分析・解釈を施していくのである。無論，この方法でニュースサイト研究の諸問題が超克されるわけではない。仮に，調査者が対象を丹念に調査したとしても，ニュースサイトの全体像を記述できるわけではない。前章で行った対象の選択自体がそもそも部分的である。しかし，それは裏を返せば本論の戦略である。

「バーチャル・エスノグラフィーは部分的にならざるをえない。情報提供者，場，文化に関する全体的な記述はおおよそ不可能である。情報提供者，場，文化は元から存在し，特定することができ，記述可能であるという考えは傍らに置いておく。その説明は，客観的な現実の信頼たり得る表象というよりも，戦略的なレリバンスの考え方に基づく」（Hine, 2000：65）。ニュースサイトに限らず，インターネットの問題を扱う際には一般化（あるいは，全体性）の罫に陥りやすい。「インターネット（で，に，を，は）」を主語とする社会科学の研究は，果たして，人々とインターネットのかかわりの全体をとらえているつもりなのだろうか。「あなたの議論はインターネット利用者一般に当てはまるかのように展開されている。しかし，私はそのようなインターネット利用をしたことはない」。こうした問いへの「適切な」回答はおそらく存在するのだろう。だが先に述べたように，本論は一般化・全体性を指向してはいない。それゆえ，フィールドワークのアプローチを援用するのは戦略的に有効であると考ええる。

▶ 4 個人ニュースサイトのニュースジャンルとニュースバリュー

まず明らかにしたいのは，個人ニュースサイトではどのようなジャンルのニュースが多く取り上げられているのか，という点である。ニュースジャンルは，新聞でいえば，政治，経済，社会，国際，スポーツあたりが主である。テレビではそこに芸能が加わる。これと同じように，個人ニュースサイトにも特有のジャンルがあるのではないかと考える（仮に新聞やテレビとジャンルが重複していたとしても構わない。それはそれで一つの発見である）。そしてこの問いは，ある話題・出来事をニュースとして選択する際の基準，つまり，ニュースバリューの問題とも必然的にかかわってくる。

こうした目的においては，明らかに独自のジャンルに特化したニュースサイトよりも，様々な話題・出来事を手広くフォローする「見出し／分類サイト」を調査対象とするのが適切と考える。そこで次にあげる五つのサイト——「カトゆ一家断絶」「Hjk/変人窟」「楽面喜堂」「ゴルゴ31」「(・▽・) イイ・アクセス」を対象として調査を行うことにする⁽¹¹⁾。調査の手順は次のとおりである。まず，調査期間を原則として2009年6月28日（日）から7月4日（土）の一週間と設定し，同期間のニュースをすべて閲覧する⁽¹²⁾。次いで，期

間内に複数の見出し／分類サイトで取り上げられたニュースを選び出して分析を行う。ただし、対象期間の前後で継続しているニュースがある場合には、それに言及することもある。

4-1 アニメ関連のニュース⁽¹³⁾

対象とした個人ニュースサイトでは、ポピュラー文化、とりわけ、アニメに関するニュースが多く取り上げられていた⁽¹⁴⁾。周知のとおり、アニメに関する話題は新聞やマス・メディアのニュースジャンルとしては主要ではない。つまり、ニュースサイトに特徴的なジャンルの一つとして「アニメ」をあげることができる。

では、実際にどのようなニュースが取り上げられていたのか。以下では、対象時期に複数のサイトで取り上げられた三つのニュースを事例としてあげる。

第一に、すべてのサイトで最も多く言及されていた話題として、2009年6月27日に公開されたアニメ映画『エヴァンゲリオン新劇場版：破』関連のニュースがあげられる。同作品は、1995～96年にテレビで放映され、絶大な人気を集めた『新世紀エヴァンゲリオン』の新シリーズである。ニュースの内容は、映画の興行収入や映画の感想を掲載したウェブサイトを紹介、また、日本テレビ系列で2009年7月4日に放映された『エヴァンゲリオン新劇場版：テレビ版「序」』の紹介など様々である。こうした事実は、エヴァンゲリオン(通称、エヴァ)の人気が依然として衰えていないことを単に示しているだけだが、ニュース論の観点でとらえると、エヴァに関する話題や出来事が期間内で最もニュースバリューが高かった、と言える。

第二は、「Hjk/変人窟」以外のサイトで取り上げられていた「ゴンゾ上場廃止」のニュースである(ゴルゴ31:6月29日 カトゆ一家断絶, 楽画喜堂, (・▽・) イイ・アクセス:6月30日)。「東京証券取引所は6月29日、アニメ制作会社・ゴンゾのマザーズ上場廃止を決めた。30日付けで整理銘柄に指定し、7月30日付で上場廃止となる」(ITmedia, 6月29日)⁽¹⁵⁾。この出来事はアニメに関心のない人にとっては、おそらく取るに足らないニュースであろうし、実際に認知している人も少ないであろう。しかし、数多くのアニメの制作・企画に関わってきた同社の経営問題は、アニメに関心がある人たちにとっては重大ニュースなのである。

第三に、テレビアニメ『けいおん!』関連のニュースもそれぞれのサイトに掲載されていた。同アニメは、2009年4～6月に放映されたアニメであり多大な人気を集めた。同アニメ関連の楽曲が音楽チャートの上位を占めたことは、その人気を示す一つの事例としてあげられる。ニュースの内容はアニメ本編の話題や関連商品情報など多様であった。その中で、「けいおんの舞台校舎、豊郷小学校への「たんぽう!」」⁽¹⁶⁾というニュースは三つのサイトに掲載されていた(カトゆ一家断絶:6月27日 ゴルゴ31:6月28日 楽画喜堂:

脚注

11. 先に選択したサイトのうち、期間内に更新した形跡がない「朝日新聞-asame.com」と、取り上げる話題が他と重複しない「[N] ネタフル」は除外した。
12. 期間設定について取り立てての意図はない。強いて言うならば、本研究に着手し始めた時期という程度である。例えば、重大な事件や出来事が起こった時期に設定してマス・メディア報道と比較するやり方もあるが、本論では日常性を重視したいので恣意的な期間の設定はしなかった。
13. アニメ、ライトノベル、マンガ、ゲーム等はジャンルを横断して作品展開されることが多々ある。それゆえ、「ポピュラー文化」と広く括ってもよい。
14. 毎日、多くのニュースを掲載している「カトゆ一家断絶」を例

- にとると、6月28日に掲載された213本のニュースのうち、84本が、メディアミックス作品を含め、アニメに何らかの関係があるニュースだった。ちなみに、翌29日は305本中112本であった。ニュースの分量、ないし、ジャンルの傾向は運営者の選好や日によって大きく左右されるために常に同じであるとは言えない。それでもやはりアニメ関連のニュースは多いことに変わりはない。
15. <http://www.itmedia.co.jp/news/articles/0906/29/news084.html>
 16. D A I さん帝国 (2009年6月27日) http://dai.at.webry.info/200906/article_1.html

6月30日)。これは、アニメの舞台となった場所をファンが訪れる現象である「聖地巡礼」に関するニュースである。同ニュースは、個人ウェブサイトの情報がニュースに変換されたものであり、その点は注目すべきであろう。

4-2 事件や社会的出来事にかかわるニュース

対象としたニュースサイトではアニメ関連のニュースが他のジャンルよりも多く掲載されている。しかし決して、そのジャンルのニュースだけを取り上げているわけではない。マス・メディアでも報道された時事的な事件・出来事にも触れている。

まず、「ゴルゴ31」以外の四つのサイトで取り上げられていたニュースとして「東芝クレイマー事件」の会社員、PC窃盗で逮捕」があげられる（カトゆ一家断絶、Hjk/変人窟、楽画喜堂、(・V・) イイ・アクセス：7月4日)。このニュースの見出しにもある「東芝クレイマー事件」はインターネット関連の出来事として非常に有名であり、多くのニュースサイトが取り上げたのもそのためであろう⁽¹⁷⁾。このようにニュースサイトの取り上げ方だけを見ると、非常に重大な出来事のように思われる。しかし、筆者が確認した限り、全国紙で広く報道されたわけではない⁽¹⁸⁾。それぞれの西部本社 of 社会面で掲載された程度である。ここからは、ニュースサイトとマス・メディア組織のニュースバリューの違いをうかがい知ることができる。

もう一つ事例として取り上げたいのは、民主党・鳩山代表の個人献金に関するニュースである。同氏の資金管理団体「友愛政経懇話会」が政治資金収支報告書に虚偽記載をしていたことが発覚し、その問題が取りざたされた。2009年6月30日には、鳩山代表は記者会見し、故人を含め約90人の架空の個人献金を虚偽記載していたことを認め、謝罪した。周知のとおり、この時期は、都議選や衆議院解散といった政局にかかわるニュースが盛んに報道されており、政権交代の主役と目されていた民主党代表の不祥事は言うまでもなく新聞紙面で大きく扱われた⁽¹⁹⁾。

対象としたサイトでは、虚偽記載をめぐるニュースは二つのサイトで（ゴルゴ31：7月1日 Hjk/変人窟：7月2日、7日）、また、その前に発覚した故人献金のニュースは一つのサイトで取り上げられていた（カトゆ一家断絶：6月17日）。こうした事実をもって、個人ニュースサイトは政治の話題にも関心を払っている、あるいは反対に、マス・メディアと比べて関心の度合いが低いと結論づけるのは拙速である。注目すべきは以下の事柄である。

まず、同時期には政局にかかわるニュースが数多く報道されていた。しかし、鳩山代表のニュースに限定されるわけではない。同じ程度に、内閣閣僚人事、自民党役員人事、都議選、衆議院解散といった自民党ならびに麻生首相にかかわるニュースが新聞各紙の第一総合面（1面）や第一社会面で報道されていた。しかし、個人ニュースサイトではそれらの話題を取り上げていない。ここから、個人ニュースサイトの政治性、さらにはネットユーザーの党派性にまで、いきなり踏み込むのは勇み足である。ただ、少なくともニュース選択における価値の差異は確認することができる。次いで、鳩山氏のニュースの引用・参照元は、新聞社などの大手マスコミではなくスレッドまとめサイトである点が特徴的である

脚注

17. 「東芝クレイマー事件」の概略は次のとおりである。東芝のビデオデッキを購入した会社員がビデオデッキ修理の際に東芝側の担当者から暴言を吐かれ、その音声ファイルを掲載したホームページ『東芝のアフターサービスについて』を開設した。同ホームページは電子掲示板などを通じて有名になり、99年7月には雑誌、新聞、テレビが相次いで報道し、インターネッ

ト上だけでなく世間にも広く知れ渡った出来事である。なお同事件に関しては、いくつかの事例研究が行われている（三上、2000；杉山・藤田、2004参照）。

18. 全国紙のうち産経新聞は確認していない。

19. 各紙とも、1面（2009年7月1日）や社説（同2日、日経は1日）で鳩山氏の問題を取り上げていた。

(痛いニュース：6月30日，同7月1日)²⁰⁾。

一見すると，個人ニュースサイトは，マス・メディアが報道する話題・出来事にも関心を払い，ニュースバリューもマス・メディア組織と共通点しているようにうつる。しかし，そこで作動しているのは独自のニュースバリューである。本節の事例だけで明言することはできないものの，ネット上には，マス・メディア組織，ならびに，読者・視聴者のそれとは異なるニュースバリューが存在することをうかがい知ることができる。

4-3 ネットの文脈で読まれるニュース

ネットでは新聞やテレビでは報じられない多くのニュースが日々生産され，流通している。本節では，対象期間中にネットの内側で話題になったニュースを三つ取り上げて，各々について説明していく。

- ①「pixiv」100万会員突破 開設から1年9カ月，サイトには記念の仕掛けも（カトゆ一家断絶：6月29日（・▽・）イイ・アクセス：6月30日 Hjk/変人窟：7月1日）

pixivとは，2007年9月に開始されたイラストの投稿・閲覧が楽しめるイラストコミュニケーションサービスである。同サービスは，イラストの投稿・閲覧に限定されず，イラストを通じた利用者間の交流も行われており，そうした，いわゆるソーシャル・ネットワーキング・サービスの機能が多くのユーザーを集めたとされる。こうしたウェブサービスの話題がニュースサイトで取り上げられたのは，本章の(1)で言及した，ニュースサイトとポピュラー文化の親和性によるものと考えられる。

- ②上海で建設中の高層マンションが根元から倒れる（カトゆ一家断絶，ゴルゴ31：6月28日 楽画喜堂：6月29日 Hjk/変人窟：7月1日）
③ロシアで海賊を“合法的に死傷させる”ツアーが問題に（カトゆ一家断絶，楽画喜堂：6月29日）

②③のニュースのジャンルは一見すると「海外」である。それは一方で正しい。だが、「海外」のカテゴリーが中心に据えられるわけではない。なぜならば，二つのニュースはネットユーザーの議論の素材に過ぎないからである。学術的な意味世界の言葉に置き換えるとすれば，いずれも，ネットユーザーの読みをうながし，意味の生産へとつながる。場合によっては，快樂をもたらすニュース，とでも言える。それゆえに，二つのニュースは「ネット」のカテゴリーに置かれる。

②は，見出しのとおり，中国の上海で建設中のマンションが倒壊したというニュースである。このニュースは，毎日新聞（6月28日朝刊）と朝日新聞（6月29日夕刊）が写真付きで報じている。しかし，紙面で取り立てて大きく扱われたわけではない。文字数は300字程度であるし，写真が掲載されているといっても，見方によっては，視覚的な側面にしか，同ニュースの価値はないと言える。しかしこのニュースが，中国の事件・出来事の「読み」を楽しむ人々が集まるコンテキストに置かれるならば，ニュースとしての価値は高くなる。ネットでは日本では起こりそうもない中国の事件や出来事がたびたび話題になる。調査・分析対象期間の少し前にも，中国国内の湖が水質汚染で変色した話題がニュースとして取り上げられていた。同ニュースに関するスレッドまとめサイト（痛いニュース，

脚注

20. 痛いニュース（2009年6月30日）「民主・鳩山代表への偽装献金90人・2,100万円「秘書が勝手にやった。処分したい」」
<http://blog.livedoor.jp/dqnplus/archives/1279342.html>

同（2009年7月1日）「民主・鳩山代表：個人献金5.9億円、匿名が6割」
<http://blog.livedoor.jp/dqnplus/archives/1279549.html>

6月23日)の記事を見ると、「水質改善にこれから30年くらいかかるんだらうな」といった具合に深刻な環境汚染として解釈されつつも、「これ絵画だろ」「芸術的ですからある」というような意味づけも行われていた。さらには、湖の写真を加工して絵画のようにした画像も作成されていた。それは、上海のマンション崩落も同様で、マンション崩落という事実を認識したうえで、「もはや芸術だなw」といった読まれ方をしていた。つまり、ニュースバリューは、出来事それ自体よりも、中国の事件・出来事に関するニュースの読みに基づくと考えられる。

③のニュースも②と同様に、ネットにおけるニュースの読みがニュースバリューをもたらしている。加えて、③のニュースでは注目すべき点がもう一つある。それは、このニュースは作り話ではないかと疑う記事が後日ブログに掲載されたことである⁽²¹⁾。そこでは、海賊死傷ツアーの情報の大本までたどって記事の信憑性を検証しており、実際に、そのニュースが虚偽情報に基づくものであることを確認している。以下に、虚偽情報が日本の個人ニュースサイトに掲載されるまでの経緯を簡単に示しておく(くわしくは、注21のブログ記事を参照)。

- ・ソマリア沖に出没する海賊を襲撃するツアーの情報を掲載する偽のウェブサイト「Somali Cruises - Cruise along Africa's east coast!」が、海外のニュースサイトでジョークとして紹介された(2009年5~6月)
- ・2009年6月22日、オーストリアの新聞「Wirtschaftsblatt」が同ニュースを掲載。ただし、記事の最後には編集者が風刺(satire)であることを記していた
- ・しかし、風刺、あるいは作り話であることが周知されずに、ニュースは引用・参照され広まっていった。そして28日には、日本語のニュースサイト「ロケットニュース24」にニュースが掲載された⁽²²⁾
- ・「ロケットニュース24」のニュースを引用したスレッドが2ちゃんねるに立てられ、その書き込みをまとめるサイトにも取り上げられた(28日)⁽²³⁾
- ・29日、本論で対象としたニュースサイトにも「痛いニュース」のリンクを張った記事が掲載された

この事例は、ネットにおけるニュースの問題を考える上で非常に多くの示唆を与えてくれる。作り話として、ジョークとして扱われていたニュースが、引用・参照を繰り返されることで、いつの間にか事実であるかのように報じられた。このことは、デマやうわさの問題ともかかわるし、ネットにおけるコピー&ペーストをめぐる問題ともかかわる(荻上, 2007参照)。あるいは、より規範的なジャーナリズム論の立場からは、誤報の一事例として、ネット・ジャーナリズムの問題点を指摘することも可能かもしれない。しかし、とりわけ後者の規範的な観点から、本ケースを問題としてあげつらうのは全くの見当違いである。マンション倒壊のニュースと同様に、海賊死傷ツアーのニュースは、発言・議論の素材になることがニュースバリューをもたらしている。それゆえ、情報の裏付けであるとか、真実性はニュースの第一要件ではない。実際に虚偽情報と明らかになった後も、「痛いニュース」のコメント欄では、その事実が明らかになったことを素材(ネタ)としてやりとりが

21. はてな読み(6月29日)「ロシア人のソマリア海賊死傷ツアーは本当なのか?」
<http://d.hatena.ne.jp/rhb/20090629/p1>
火薬と鋼(6月29日)「ソマリア海賊狩りツアーはデマか」
<http://d.hatena.ne.jp/machida77/20090628/p2>

22. 「ロシアで海賊を“合法的に死傷させる”ツアーが問題に」
<http://rocketnews24.com/?p=11485>

23. 痛いニュース(2009年6月28日)
<http://blog.livedoor.jp/dqnplus/archives/1278672.html>

展開されている。そこには、社会的に重要な出来事の報道としてのニュースは存在しない。読みの交換を通じた意味の生産・共有だけがニュースを成立させている。もう少し踏み込むならば、読みをめぐる快樂だけがニュースであることを担保しているのである。

▶ 5 個人ニュースサイトとジャーナリズム

前章では、対象とした個人ニュースサイトで特徴的なニュースジャンル、ならびにニュースバリューの問題について主に論じた。それにより、既存の（オンライン）ニュース論では扱ってこなかった側面を明らかにすることができた。次いで本章では、個人ニュースサイトとジャーナリズムの問題について考察する。なお、ジャーナリズムの定義については以下を参照する。「ジャーナリズムとは、日々生じる無数の出来事のなかからいくつかを選択し、取材し、編集し、報道する活動し、また報道した出来事について解説・論評する一連の活動を指し示す」（大石、2004：221-222）。この定義はマス・メディアの活動を前提としたものである。

だが、この定義をネットの営みにそのまま当てはめると一つの問題が発生する。「個人ニュースサイトの営みは果たしてジャーナリズムなのだろうか」。仮に、定義中にあるすべての要件を満たす実践のみをジャーナリズムとするならば、例えば「見出し／分類サイト」はジャーナリズムに含まれない。厳密さを追及すると、個人ニュースサイトに限らず、インターネットを通じた表現活動のほとんどがジャーナリズムにあたらなくなる。極端に言えば「インターネットとジャーナリズム」という問いも成立しなくなる。そこで、本論ではそこまでラディカルな見方はとらずに、先に示した定義を一種の理念型として、それとの遠近でジャーナリズムのあり方を考えることにする。

5-1 ユニークサイト

見出し／分類サイトではポピュラー文化に関する話題が多く取り上げられていた。では、そのような話題のソースはどこに求められるのだろうか。それはもちろん数多く存在しているが、その中でも一際多く参照されるサイトの一つとして「アキバ Blog（秋葉原ブログ）」があげられる。

例えば、見出し／分類サイトの中で最も多くのニュースを掲載している「カトゆ一家断絶」では、「アキバ Blog」のニュースを毎日数本掲載している。同様に、他の四つのサイトでも「アキバ Blog」のニュースが掲載されることは多い。いくつかのサイトで取り上げられたニュースとして、①「鬼月あるちゅ：メイド嫁「アキバは発売日前に壊滅状態になるのかしら⁽²⁴⁾」」（カトゆ一家断絶：6月29日 ゴルゴ31：6月28日 関連記事「鬼月あるちゅ初単行本「メイド嫁」バカ売れ完売⁽²⁵⁾」楽画喜堂：6月28日）、②「お知らせと「透けちゃってる」お詫び」（ゴルゴ31：6月28日 カトゆ一家断絶、Hjk/変人窟：6月29日）があげられる。前者は成年コミックの発売に関するニュースであり、後者はライトノベル関連のニュースである。これらのジャンルに属する話題は、新聞やテレビなどのマス・メディアで報道されることは少ない。それゆえに、ポピュラー文化の象徴である東京・秋葉原の話題、出来事、事件を、ほぼ毎日欠かさずに掲載する「アキバ Blog」の記事は需要が高いのである。

同サイトについては、見出し／分類サイトの情報元以外の面でも注目すべき点がある。

脚注

24. アキバ Blog (2009年6月28日) <http://blog.livedoor.jp/geek/archives/50852804.html>

25. 同 (2009年6月27日) <http://blog.livedoor.jp/geek/archives/50852491.html>

運営者は「365日中360日くらいは秋葉原を巡回しています」と公言しているように²⁶⁾、自ら秋葉原を取材して、原則、毎日7本の記事を掲載している。これを、「個人によるネットを利用したジャーナリズム活動の一事例」として位置づけることは十分に可能であろう。この点をふまえて指摘しておきたいことが一つある。いささか印象論も含まれるのだが、ジャーナリズム論の文脈で、個人によるネット・ジャーナリズムを考える際には、マス・メディア報道を補完するような、公共の話題・出来事を扱うジャーナリズムを前提としてきた感がある。そして、そうした前提に基づいて、個人によるネット・ジャーナリズムの可能性や限界を論じる節がある。その論旨については説得力もあり、納得もできるが、視野や対象の狭さには不満を覚える。ネット・ジャーナリズムの問題を論じる際には、従来のマス・メディア報道のそれと同じ枠組みで考えるだけでは不十分である。これは本論に通底する問題意識である。ネットに軸足を置くニュース生産を、従来のジャーナリズム論の枠内に押し込めることは有益なのだろうか。それは、ネットが広く利用されている社会におけるジャーナリズムに関する議論の発展を阻害するように思う。

5-2 スレッドまとめサイト

4-2, 4-3の事例の多くで情報元として選択されていたサイトとして「痛いニュース」があげられる。この種のサイトは「痛いニュース」に限らず、数多く存在している。スレッドまとめサイトについては随所で触れてきたので、ここでは一つの論点に関する考察にとどめておく。それは、スレッドまとめサイトが行う選択、取材、編集の過程である。

スレッドまとめサイトは、掲示板・2ちゃんねるのスレッドに書き込まれた内容をまとめたサイトである。2ちゃんねるの一つのスレッドの書き込み上限は原則として1,000である。スレッドまとめサイトの記事は、その1,000（に満たない場合もあるが）の中から、サイトの作成者が重要とみなした書き込みを選択して、再構成したものである。この過程は、2ちゃんねるで話題の出来事や情報を、選択、取材、編集し報道する活動と換言できる。それは、ニュースの生産活動を指し、ジャーナリズムの要件の多くを満たしている。

スレッドまとめサイトは、一見すると2ちゃんねるの延長であり、その掲示板自体、ならびに文化への評価が好き、嫌い、肯定、否定、愚劣など様々なので、言及しづらい側面は多分にある。加えて、前節で事例として取り上げた「アキバBlog」のように、自らの足で取材して、独自のニュースを生産しているわけではない。しかしながら、2ちゃんねるを、そして、そのスレッドを、様々な情報が集まり、時として出来事が起こるフィールドとしてとらえるならば、そこから特定のトピックを「選択」して、「取材」し、取材した情報を「編集」して報道する活動は、言い切ることにややためらいもあるが、ニュースの生産であり、やはり、ジャーナリズムの実践なのである。

▶ おわりに

個人ニュースサイトの歴史は古い。日本のインターネット元年と言われる1995年には個人ニュースサイトは存在していた（ばるぼら、2005参照）。全国紙のサイトが開設されたのも1995～96年である。すなわち、ニュースサイトとしては、双方は同じだけの歴史を積算している。その割には、個人ニュースサイトへの言及、そして研究は少ない。

個人ニュースサイトは一言で表すことはできない。「個人ニュースサイトとは何だろう。

26. ASCII.jp(2008年10月27日)「古田雄介の“顔の見えるインターネット”第36回「アキバの現実」報道する「アキバBlog」の現在」

<http://ascii.jp/elem/000/000/182/182590/>

その答えは想定するサイトや時期によって全くイメージが変わってしまう。「海外情報を日々転載／翻訳するサイト」「日々の出来事を記録するサイト」「商用ニュースサイトにリンクを張ってコメントを加えるサイト」「情報をもとにコラム的文章を各サイト」「あるジャンルの情報を専門的に蒐集するサイト」……一体誰がこれを一言で表せるだろう？」(ばるぼら, 同書:245)。このとらえどころのなさは、個人ニュースサイトの把握を困難にしている要因である。しかし別の見方をすれば、ニュースジャンルとニュース生産の多様化を意味する。それは結果的に、既存の「ニュース」概念に揺さぶりをかけることにつながる。

「個人ニュースサイトは既に終わったジャンル」とも言われる。「SBM(ソーシャル・ブックマーク)とかのRSSを活用し、個人ニュースサイトを見なくなってから個人ニュースサイトを見る奴が情弱(情報弱者)に見えるようになった。はっきり言って彼らは終わってるだろう。まず個人サイトが終わっているということ。pixivやニコニコ動画を見てもわかるように今は個人サイトの時代じゃない」(はてな匿名ダイアリー, 2009年2月9日カッコ内は引用者補足)²⁷⁾。この指摘の妥当性を確かめることは難しい。それに、もしかすると、議論の喚起を狙った、俗に言う「釣り」記事かもしれない。それでも、あえて議論に乗るならば、ネットで大きな話題となるような出来事や事象について知る際に、ソーシャルブックマークのようなサービスを介して認知するのと、個人ニュースサイトを通じて認知することの間に大きな差があるとは思えない。それぞれ機能は異なるし、ネットで話題の出来事については個人ニュースサイトで十分に補完できる。そもそも、メタ的に見ると、個人ニュースサイトに言及する記事があること自体が、ニュースサイトの存在を際立たせているとも言える。

このようにニュースサイトの問題については、まだ議論の余地が十分にある。本論はその端緒に過ぎない。本論中であげた様々な論点については、今後、一つひとつ扱っていく必要があるだろう。そして、その際には、ニュース論やジャーナリズム論で蓄積されてきた豊かな概念・理論への翻訳を逐一行うことが必要となってくる。本論中で折に触れてきた、ニュースジャンル、ニュースバリュー、ニュースの読み、ジャーナリズムといった概念、ならびに、それらに関わる理論は、広義のメディア研究で練り上げられてきた。個人ニュースサイトに関する議論もそれらの中に組み込まなければならない。そうすることで、本論のような単なる事実を整理しただけの議論を発展させることができる。月並みではあるが、この試みは今後の課題としておく。

最後に改めて問題提起を行う。インターネットとニュース、ならびにインターネットとジャーナリズムについて議論する際に、どうして、マス・メディア組織が担うそれを対に布置しなければならないのか。例えば、マス・メディア組織の活動を補完するインターネットの表現活動に期待しながら、その限界を指摘する。「インターネットは、迅速な個人的コミュニケーションのエリアを地球規模に広げた。個人が意見を発信・受信するにはかつてない便利な時代となった。しかしジャーナリズムの基本は事実の伝達であり、個人の生活範囲・活動範囲で入手・発信できる固有の事実情報には限界がある」(原, 2009:208)。また、その論理を敷衍して、インターネット社会においてマス・メディア組織の活動が有する可能性を指摘したりする。「(インターネットや携帯電話は社会生活に不適合な「会話」への耽溺をもたらしているが)日常的にこのような新聞を閲読する習慣を保持していれば、社会生活への適合に求められる総合的な感覚や思考の退行を、免れることができる」(桂, 2009:127 カッコ内は筆者による引用前部の要約)。こうした指摘は妥当な面もあるし、

腐すつもりは毛頭ない。いくら教科書的な物言いであろうとも、マス・メディア組織によるニュース報道、ならびにジャーナリズムが民主主義社会にとっての要であることは論を待たない。またそうした観点に立脚した議論は続けられるべきである。だからといって、その流れで、なかば、あてつけのように「インターネット」を持ち出さなくてもいいように思う。ネットにおけるニュースの営みやネット・ジャーナリズムのあり様は別のところにも見出せるのである。本論の考察が、安易な立論、その思考停止を打破するためのきっかけになる、と言い切る自信はないものの、少しでも寄与できるならば幸甚である。

●参考文献

- ばるぼら (2005) 『教科書には載らないニッポンのインターネットの歴史教科書』 翔泳社
- Deuze, Mark (2003) The Web and its Journalisms: Considering the Consequences of Different Types of Newsmedia Online, *New Media & Society*, Volume5 (2) :203-230, SAGE.
- 遠藤薫編 (2004) 『インターネットと〈世論〉形成——問メディア的言説の連鎖と抗争』 東京電機大学出版局
- 遠藤薫 (2007) 『問メディアと〈世論〉形成——TV・ネット・劇場社会』 東京電機大学出版局
- 原寿雄 (2009) 『ジャーナリズムの可能性』 岩波新書
- Hine, Christine (2000) *Virtual Ethnography*, SAGE.
- 桂敬一 (2009) 「新聞とジャーナリズム」 浜田純一・田島泰彦・桂敬一編 『新聞学』 日本評論社
- 三上俊治 (2000) 「公共圏としてのサイバースペース——インターネット時代における世論形成過程」 『社会情報学研究』 4 : 17-23
- 中村功 (2005) 「インターネット・携帯電話 5 インターネットとジャーナリズム」 藤竹暁編 『図説 日本のマスメディア [第二版]』 NHK ブックス
- 成田康昭 (2009) 「ニュース接触における情報格差——インターネット・ニュースサイト利用における熟達度の影響」 『応用社会学研究』 No.51
- 荻上チキ (2007) 『ウェブ炎上』 ちくま新書
- 大石裕 (2004) 「政治環境とジャーナリズム」 田村紀雄・林利隆・大井真二編 『現代ジャーナリズムを学ぶ人のために』 世界思想社
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法——原理・方法・実践』 新曜社
- 杉山あかし・藤田高弘 (2004) 「インターネットの普及と“言論空間”の変容——「東芝ビデオ事件」をめぐって」 『社会情報学研究』 8 (2) : 27-40

(平井智尚 日本大学／十文字学園女子大学／二松学舎大学／武蔵野大学非常勤講師)